

【特別講義要旨（2）（'89.11.14）】

南北問題の新展開と開発援助

加藤 壽 延

（亜細亜大学経済学部教授）

1989年12月8日からマルタ島で開催された米国のブッシュ大統領とソ連のゴルバチョフ書記長との会談は、第2次世界大戦以降の世界史の流れを一区切りした象徴的な出来事であった。コピーライターふうに云うならば、「ヤルタ秩序体制さようなら、マルタ秩序体制こんにちは」となるろう。

ヤルタ秩序体制は、第2次大戦後の世界経済社会の2分割構想——米国を中心にしたドル（市場）経済圏 vs ソ連を中心にしたルーブル（計画）経済圏——の確定とその遂行体制であり、国際関係論的には、東西関係の起点であった。東西関係の対立・競争に伴って発生した「南北問題」、あるいは第3世界に対する「開発・協力」という「経済援助」問題の進展・変化は、このヤルタ秩序体制の推移・変質との関連で理解される必要がある。

ヤルタ秩序体制が、それぞれの経済圏の秩序原理の行きづまりから音をたてて崩壊し、そしてまた新しく求められている「マルタ秩序体制」の処方箋のためにも、あるいは日本のそれへのかかわりを模索するためにも、南北問題の展開と開発援助の実態にかんする回顧と展望の作業が要請されているのである。その予備的試論が、当日配布したレズメである。